

博士学位請求論文要旨

人は、物理的な特徴の有無に関らず、刺激と刺激を恣意的に関係づけることができる (Törneke, 2010 山本・熊野訳 2013)。この刺激と刺激の関係づけに着目している理論として、関係フレーム理論(Relational Frame Theory; 以下, RFT とする; Hayes, Barnes-Holmes, & Roche, 2001)がある。RFT では、刺激と刺激を同じ(等位)や違う(相違)など、複数の種類の関係づけを想定しており、この関係づけが人の行動を制御する 1 つの要因であると考えられている。本稿は、この RFT の理論を背景としている刺激間の強度と関係性を測定する尺度 Implicit Relational Assessment Procedure(以下, IRAP とする; Barnes-Holmes, Barnes-Holmes, Power, Hayden, Milne, & Stewart, 2006)を使用し、RFT の枠組みから日本人大学生の潜在的自尊感情(Implicit self-esteem; 以下, ISE とする)を検証したものである。

ISE は、質問紙などの自己報告式尺度で測定する顕在的自尊感情(Explicit self-esteem; 以下, ESE とする)と異なり、間接的に自己評価を求める尺度により測定する(Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003)。ISE を測定する代表的な尺度として Implicit Association Test(以下 IAT とする; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)がある。IAT で ISE を測定する場合は、「自分一肯定語」、「自分一否定語」、「他者一肯定語」、「他者一否定語」の 4 つの組み合わせを設定し、「自分一肯定語」と「他者一否定語」、「自分一否定語」と「他者一肯定語」を、それぞれ同時に提示する。そして、関連語の振り分けまでの反応潜時を指標として、連合強度を測定する。この連合強度が、ISE の得点となっている。IAT による大学生を対象とした場合の ISE の先行研究では、「自分一肯定語」と「他者一否定語」の連合強度が強く示され、この連合強度が強い者ほど、ネガティブ事象の影響を緩衝する(和らげる)ことが明らかとなっている(Greenwald & Farnham, 2000)。そのため、ISE を高めることに対する臨床的意義が提唱されている(藤井, 2018)。しかしながら、IAT で ISE を測定する場合、それぞれの連合強度の結果を個別に示させないことや、刺激間の関係性を等位でしか測定できていないとの指摘がある(Stewart et al., 2017)。

その一方で、IRAP で ISE を測定する場合は、IAT で用いる 4 つの刺激の組み合わせに対して、「はい」や「いいえ」など 2 つの刺激間の関係性を示す選択肢からの反応を求める。そして、それぞれの選択までの反応潜時を指標として、刺激間の関係性とその強度を測定する。例えば、「自分一肯定語」の組み合わせに対して、「はい」の選択が素早い場合、等位(=)の関係性で「自分一肯定語」の刺激間の強度が強いことを示している。また、IRAP では、選択肢間の反応潜時の差を基盤として、各組み合わせの刺激間の関係性と強度を示す D-IRAP 得点を算出する。この D-IRAP 得点が、ISE を示している。

IRAP により ISE を測定した先行研究を概観したところ、大学生を対象とした場合、自分と肯定語を、等位(自分=肯定語)の関係性として示す傾向が示されており、そして、自分と肯定語の刺激間の関係づけが強い者ほど、抑うつ感と負の相関、生活の満足感と正の相関

が示されている(Timko et al., 2010; Stewart et al., 2017)。このことから、「自分＝肯定語」の刺激間の強度は、心理的な健康と関連していると言われている(Timko et al., 2010)。その一方で、自分と否定語については、相違(自分≠否定語)の関係性を示している結果と示していない結果が、それぞれ報告されている。「自分－肯定語」に対する等位の関係性と「自分－否定語」に対する相違の関係性は、それぞれ自分を肯定的に評価しているという点で、一致しているものの、それぞれ異なる傾向を示している。これは、「自分－肯定語」への反応と、「自分－否定語」への反応の心理的作用が、それぞれ異なっていると考えられる。例えば、ISEの臨床的意義として挙げられている緩衝機能は、「自分－肯定語」に対する肯定的な反応が作用するのか、もしくは「自分－否定語」に対する否定的な反応が作用するのか不明瞭である。また、IRAPでISEを測定する際に使用する刺激セットは、大きく分けるとVahey et al. (2009)の刺激セットとTimko et al. (2010)以降の刺激セットの2種類がある。

これらを踏まえ、本稿では日本人大学生を対象として、ISEをIRAPで測定し、「自分－肯定語」と「自分－否定語」に対する等位及び相違の関係性やその強度の観点から、ネガティブ事象に対するISEの緩衝機能の検証及び臨床的意義についての考察を目的とした。この目的のために、本稿では、(1)ISEを測定する2つの刺激セットそれぞれのIRAPにおける結果の再現性の検証、(2)ISEの先行研究で明らかとなったISEの緩衝機能と、「自分－肯定語」及び「自分－否定語」のD-IRAP得点との関連性の検証、(3)「自分－肯定語」及び「自分－否定語」の強度及び関係性に関する変数の検証の3つの検討点を挙げ、これらを検討するために、4つの研究を実施した。

研究1では、Vahey et al. (2009)の刺激セットを参考に、日本人大学生のISEをIRAPで測定し、Vahey et al. (2009)の大学生の結果と、同様の傾向が再現されるかを検証した。Vahey et al. (2009)では、大学生を対象にIRAPでISEを測定したところ、自己肯定及び他者否定の傾向を示した。この傾向が、自己否定的な傾向を示す日本人(北山・唐澤, 1995)を対象とした場合においても、再現されるかを検証した。研究1の結果、日本人大学生においても、自己肯定及び他者否定の傾向を示した。つまり、日本人大学生を対象にIRAPでISEを測定した場合においても、同様の傾向を再現することが明らかとなった。

研究2では、研究1と異なりTimko et al. (2010)以降の刺激セットであるStewart et al. (2017)の刺激セットを参考に、日本人大学生のISEをIRAPで測定し、先行研究の結果と同様の傾向が再現されるかを検証した。加えて、研究2では、ネガティブ事象に対するISEの緩衝機能と、ISEを測定する際の4つの組み合わせとの関連性についても検証した。Stewart et al. (2017)では大学生を対象に、IRAPでISEを測定したところ、「自分－肯定語」の組み合わせが等位の関係性で、刺激間の強度が強く示されていた。研究2では、Stewart et al. (2017)と同様の傾向が日本人大学生を対象とした場合においても、再現されるかを検証した。他にも、研究2では、ISEのネガティブ事象に対する緩衝機能が、ネガティブ事象からの心理的回復力を指すレジリエンス()のように機能するのか、そして機能する場合、どの刺激の組み合わせに関連しているのかを検証した。研究2で用いるレジ

リエンスの尺度(田中・兒玉, 2010)は、自己受容、他者信頼感、自己能力信頼感、楽観的思考の4つの因子で構成されており、これらの因子と4つの組み合わせごとのD-IRAP得点について相関係数を算出した。まず、IRAPの結果については、「自分＝肯定語」が等位の関係性で、強く示されていた。そのため、日本人大学生においても、Stewart et al. (2017)と同様の傾向が再現された。次に、レジリエンスとIRAPで測定したISEの関連性については、楽観的思考と「自分＝肯定語」のみに、有意な正の相関が示された。このことから、「自分＝肯定語」の組み合わせに対して、「はい」と素早く選択できる者ほど、物事を楽観的に捉える傾向が示された。

研究3では、IRAP以外の尺度で検証が行われたISEの緩衝機能の実験を、尺度をIRAPに変更して実施した。Greenwald and Farnham (2000)では、実験参加者を2種類の難易度の課題(高難易度・低難易度)に振り分け、課題後の評価と2種類の自尊感情(ISEとESE)の関連性を検証した。Greenwald and Farnham (2000)の結果、高難易度課題群でISEの高い者ほど、ネガティブ(低い得点)なフィードバックを受けたにも関わらず、課題で測定した能力の重要性を高く評価し、再度課題を行えば得点を高められると評価した。この結果からGreenwald & Farnham (2000)では、ISEは高難易度課題後のネガティブなフィードバックの影響を緩衝する機能があると考察している。研究3では、Greenwald & Farnham (2000)の手続きを参考にしつつ、ISEの尺度をIRAPに、従属変数を課題の続行回数に変更し実施した。また、課題を解決可能な課題と不可能な課題の2種類を用意し、実験参加者をそれぞれの課題に振り分けた。解決不可能な課題は、必ずネガティブなフィードバック(低い得点)が、与えられるようにするための操作である。研究3の結果、解決不可能課題群において、「自分＝肯定語」の関係性が等位で強い者ほど、課題を続ける傾向が示された。また、解決可能課題群との交互作用は示されなかったものの、「自分＝否定語」の関係性が相違で強い者ほど、課題を続ける傾向が示された。このことから、「自分＝肯定語」や「自分＝否定語」のD-IRAP得点は、緩衝機能と関連していると考えられる。

研究4では、研究3で得られた知見を参考に、困難さを与える課題の達成が、「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の関係づけの強さに、影響を与えるか検証した。高難易度と低難易度の課題を用意し、実験参加者をそれぞれの課題に振り分けた。そして、課題の前後にIRAPでISEを測定した。研究4の結果、高難易度の課題を実施した群の、課題後の「自分＝肯定語」の得点が高く示された。一方で、有意傾向ではあるものの、「自分＝否定語」が等位の関係性で示された。この結果から、高難易度の課題を実施することで、自己肯定感が高まるものの、自己否定感も高まる可能性を示唆した。

本稿における4つの研究で得られた知見を総括すると、日本人大学生を対象にIRAPでISEを測定した場合においても、先行研究と同様の傾向を示すこと、自分＝肯定語の関係づけが強い者ほど、物事を楽観的に捉え、ネガティブなフィードバックを与える課題を長く続けること、高難易度の課題を実施すると自分＝肯定語の関係性が強まることが明らかとなった。また、自分≠否定語の者も、ネガティブなフィードバックを与える課題を続ける傾向

が示されたが、高難易度の課題を達成後に自分＝否定語の関係づけも促進する可能性も示唆された。

以上のことから、RFT の観点における自己評価は、自己肯定への肯定と自己否定への否定は、異なるということを本研究の結果から示唆し、これらを個別に検証する意義を提示した。